

# 平成6年度赤潮貝毒監視事業（赤潮貝毒調査）

## （要 約）

青森県水産増殖センター 漁場部 三津谷 正・秋山由美子・永峰 文洋・田村 眞通  
・浜田 勝雄船長ほか「なつどまり」乗組員  
青森県環境保健センター 理化学部 今井美代子・三浦 啓徳・高橋 政教  
青森県水産試験場 漁業部 松原 久・川村 俊一・伊藤 欣吾・鈴木 史紀  
・高井 英和船長ほか「開運丸」乗組員・  
村上 誠七船長ほか「東奥丸」乗組員・磯島 秀雄  
船長ほか「青鵬丸」乗組員

青森県沿岸域において、ホタテガイ等の毒化監視のため、1994年1～12月の期間、定期的に陸奥湾定点調査、陸奥湾全湾調査、外海定点調査、二枚貝等安全対策調査、広域分布調査を実施し、貝毒検査、環境調査、プランクトン調査を行った。詳細については、平成6年度赤潮貝毒監視事業報告書（平成7年3月、青森県）として報告した。

### 調査結果の概要

1. 陸奥湾においては、まひ性貝毒については原因プランクトンの出現が認められず、ホタテガイの毒力も検出限界未満（ $<2.0\text{MU/g}$ ）で推移した。下痢性貝毒については、原因プランクトンの出現が3月半ば頃から目立ち始め、最多出現数は *D.acuminata* は4月の西湾で  $115\text{cells/l}$ 、*D.fortii* は6月の東湾で  $600\text{cells/l}$  であった。なお、全湾調査による *D.fortii* の最多出現数は、6月調査時の  $2240\text{cells/l}$  であった。ホタテガイの下痢性貝毒による毒化期間は、養殖貝については4月4日～8月2日、地まき貝については3月28日～8月2日であった。また、最高毒力は、養殖貝については  $2.0\sim 3.0\text{MU/g}$ （中腸腺）、地まき貝については  $0.5\sim 0.6\text{MU/g}$ （中腸腺）であった。毒化に伴う出荷自主規制期間は、養殖貝については4月8日から9月16日、地まき貝については6月2日～9月19日であった。陸奥湾の下痢性貝毒は、1990年あるいは1991年以降、ホタテガイの低毒化、原因プランクトンの低出現傾向が続いているが、1994年は近年の低毒化年にくらべれば毒力が比較的高く、原因プランクトンの出現数も多めであった。
2. 津軽海峡においては、まひ性貝毒については西部・東部の両海域とも原因プランクトンの出現が認められず、ホタテガイの毒力も検出限界未満で推移した。下痢性貝毒については、西部海域における *D.fortii* の最多出現数は5月の  $80\text{cells/l}$ 、養殖ホタテガイの毒化期間は5月11日から6月8日、最高毒力は  $0.5\sim 1.0\text{MU/g}$ （中腸腺）、毒化に伴う出荷自主規制期間は6月17日～8月12日であった。東部海域においては、*D.fortii* の最多出現数は5月の  $70\text{cells/l}$ 、地まきホタテガイの毒力は最高でも6月6日の  $0.3\sim 0.5\text{MU/g}$ （中腸腺）にとどまり、毒化に伴う出荷自主規制は行われなかった。
3. 太平洋においては、ホタテガイが採捕されず貝毒検査を行わなかった。まひ性貝毒原因プランクトンは *A.tamarense* が10月に最多で  $180\text{cells/l}$  出現した。下痢性貝毒原因プランクトンは4月から増加しはじめ、*D.fortii* の最多出現数は6月の  $3460\text{cells/l}$ 、*D.acuminata* のそれは7月の  $790\text{cells/l}$  であった。
4. ホタテガイ以外の二枚貝は、まひ性貝毒については全ての対象種とも検出限界未満の毒力で推移した。下痢性貝毒については、暖流系海域のムラサキイガイに4月19日から9月12日まで毒化が認められ、その最高毒力は  $1.0\sim 2.0\text{MU/g}$ （中腸腺）、毒化に伴う出荷自主規制期間は4月25日から10月4日であった。また、寒流系海域のムラサキイガイについても6月16日に毒化が認められ、その毒力は  $0.5\text{MU/g}$ 、毒化に伴う出荷自主規制期間は6月23日から9月14日であった。このほかの対象種については毒化が認められなかった。